

RSK山陽放送ラジオ 朝耳らじお5・5

「永瀬清子の光を受けて」 vol. 8 二〇二二年十月十八日

草の実

小林章子（RSKアナウンサー）

伊藤正弘（RSKアナウンサー）

白根直子（赤磐市教育委員会熊山分室学芸員）

小林 この時間は、「永瀬清子の光を受けて」と題して、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらっしやる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。今日もよろしく願います。

伊藤 こんにちは、よろしく願います。

白根 こんにちは。よろしく願います。今日は、先月に引き続き、晩年の永瀬さんが後に続く皆さんにぜひ伝えたいと思っていたことを書いた「草の実」という詩を紹介します。これは、一九七七年に短章「また」（『流れる髪 短章集2』思潮社 一九七七年二月）という題名で発表し、十数年かけて書き直していったものです。

草の実

私はとげのある小さい草の実だったから

人の袖にとりつくほか何もできなかった

けれどその人も野をゆくさびしい旅人だったので

しばらく私を運んだが

やがて私を落した

私は途方にくれたがそのさびしさをまぎらそうと

小さな私の詩を書いた

私は今 これらの事がはじめから

大きな何者かの計画どおりだったと知り

わが悲しみをもちこしなくさめた

翌年の春 くさむらの中に

同じとげのある草が芽ぶいていたので

私は私の詩のためにすこしほえんだ

そして思う

悲しみと詩とほんとはどちらがあるじかと――

（永瀬清子『永瀬清子の詩のこころ』として詩『鳥越ゆり子 一九九四年十月』）

小林 伊藤さん、この「草の実」はどんな印象ですか。

伊藤 運命にはあらがえない。でも、それを受け入れて生きていくみたいなメッセージを受けとったんですが、いかがでしょう。

小林 白根さん、この「草の実」という詩は、十数年かけて書き直した詩だとおっしゃいました。永瀬さんは、とても大切になさって

いたんだろうと思いますが、伊藤さんの感想はどんな風に感じられましたか？

白根 「運命」を「受け入れて生きていく」とは、まさにそのとおりだと思います。「草の実」は、永瀬さんが十代の頃から詩を書き続けてきた半生を振り返った詩です。晩年の永瀬さんは、詩を書いてきたことが、「大きな何者かの計画どおりだった」、つまり何か目に見えない大きな存在に書かされていたのではないかと考えないではいられなかったようでした。この思いは他の詩にも反映しているんです。

小林 「草の実」は永瀬さんが晩年、朗読会で読まれたことがあるそうですね。

白根 そうなんです。永瀬さんと谷川俊太郎さんとの朗読会は、一九九三年十月十六日に、アムネスティ岡山が主催して岡山市立オリエント美術館で開かれました。この時の永瀬さんは目が不自由になつていたので開催が危ぶまれたほどでした。

小林 それでも開催できたのは、どのような事情があつたのでしょうか。

白根 他ならぬ谷川俊太郎さんが助けてくださるということで実現したんです。この時永瀬さんは、朗読する詩を準備していたのですが、それを見ながら朗読することができませんでした。そこで、即興で朗読したんです。

小林 永瀬さんが即興で朗読した「草の実」がこちらです。

草の実

私は小さな草の実だったので

人の袖にすがって野原をゆくほかにはなかった

でもその人もやっぱり旅人だったので

私をしばらく運んだけれども、

私を落してしまった

私はそれは悲しんだけれども

それは私はよくよく考えれば

そのことが自然の理由の道理になっているんだということが少しわかってき

だしたのだ。

私は少しずつ回復してきて

そして私はその野原の土の上に今横たわっているのです

私と云う小さな小さな草の実

小林 伊藤さん、冒頭に朗読した「草の実」と、即興で読んだ「草の実」、どう感じましたか？

伊藤 冒頭の方は、運命に対して少しあらがうような様子もうかがえたんですけども、即興の方は、今の、現実を受け入れた状態、その違いがあるのかなと思いました。

小林 そうですね。私は、即興の方は永瀬さんの話し言葉にも近いのかなと感じましたが、白根さんいかがでしょうか。

白根 冒頭の方は、運命にあらがっていて、即興の方は受け入れて

いるという見方は、とてもおもしろいなと思いました。そういう見方もできるんですね。また、「話し言葉に近い」というのは、その時の永瀬さんのリズムが感じられるからなのかもしれない、と思いました。

この会で谷川さんは、永瀬さんについて「風格としてはホメロスみたいなものですね」とおっしゃり、年を重ねることがいかにすばらしいかの実例として、繰り返し語っていらしたのが印象的でした。

小林 「ホメロスみたい」というのは、どういうことでしょうか。

白根 谷川さんは、古代ギリシャの詩人ホメロスが即興で詩を朗読していたこと、ホメロスの詩が古典として読まれていること、永瀬さんのギリシャへの憧れなどを踏まえ、永瀬さんが古典となる詩を書く詩人であるという例えをなさったのではないのでしょうか。

小林 素敵な表現ですね。谷川さんが永瀬さんを敬愛されているというのが感じられますね。

白根 はい。永瀬さんは、いい詩は暗唱できるとたびたび語っています。それは、心に深く刻み込まれるような言葉で書かれているからです。そのような言葉にたどりつくまで、永瀬さんは、どうしても書いておきたいことを、繰り返し話したり書いたりしています。また、詩として発表したものを詩集に入れるばかりではなく、随筆や短章として発表したものを詩に書き直しています。この「草の実」もそうした詩のひとつなんです。

小林 ということは、「草の実」は少しずつその姿を変えているということなんですね。

白根 そうなんです。そうしたところも永瀬さんの詩の魅力のひとつです。ただいま、最晩年の永瀬さんを支えた一人である鳥越ゆり子さんのご協力により、今日ご紹介した「草の実」という詩が、どのように書き直されたかなどがわかる初公開の最晩年の資料を、永瀬清子展示室で展示しています。

小林 初公開の最晩年の資料。これはファンの方にとっては見応えのあるものですね。そして永瀬さんがどんなふうに考えて、十数年かけて書き直し続けたという「草の実」、どんな移り変わりがあったのかということが感じられて、永瀬さんがどんなふうに考えていらっやったのかということも感じられるんですね。

その永瀬清子展示室での展示ですが、会期は十二月十二日(日)までということなんです。今日は休館日ですね。毎週月曜日はお休みです。ご注意ください。開館は午前九時から午後五時までです。赤磐市くまやまふれあいセンターの二階にあります。いつもお話を聞いている白根さんにも出会えるかもしれません。白根さん、今日もありがとうございます。

伊藤 ありがとうございます。

白根 ありがとうございます。

小林 「永瀬清子の光を受けて」でした。

※記載されている情報は、二〇二一年十月十八日現在のものです。

※令和三年度永瀬清子展示室企画展「永瀬清子と鳥越ゆり子―最晩年の二冊の

手のひら詩集そのほか」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、岡山県に緊急事態措置が八月二十七日から九月十二日まで、まん延防止等重点措置が九月十三日から九月三十日まで適用により、十月一日から開催しました。そのため、当初、九月三日から十一月十四日までとされていた会期を十二月十二日まで延長しました。

〈参考文献〉

『資料集―永瀬清子の詩の世界 第三集』赤磐市教育委員会熊山分室 二〇一五年十二月